次郎兵衛淵の大蛇（井ノ草）

井ノ草と長坂の間の川に、次郎兵衛淵という大きな淵がありました。

日照りが続き、作物のできない年が三年も続きました。米は半分も実らず、年貢も納められません。三度の食事も満足にできない日が続きました。

村人たちは集まって相談しました。

「今年も雨が降らなかったら、体力のない子どもや年寄りは死んでしまうにちがいない。」

「なんとかならないだろうか。」

「どうにか水を確保できないだろうか。」

「そうだ。次郎兵衛淵のとゆ※をもう少し大きくしてみないか。」

村人たちはさっそく次郎兵衛淵のとゆを大きくして水路を掘り下げました。大変な作業でしたが、水を確保したい一心で、村人たちは精を出して働きました。

「これで、水が来るぞ。」

すると、見る間にそれぞれの田んぼに水が入り出しました。枯れてひからびたようになっていた田んぼが、次々にうるおっていきます。年寄りたちは手をたたいて喜び、子どもたちは泥だらけになって走り回りました。

やがて、田植えをした苗はすくすくと伸び、青々とよく育っていきました。

ところがあるとき、突然水がこなくなったのです。若者たちが水路を見て回りましたが、どこにも変わったところはありません。次郎兵衛淵までやってきました。

「水路に大きな枯れ木がひっかかっているぞ。」

「これでは、水がこないはずだ。」

若者たちは枯れ木をのけようと、細くなっているところをにぎり、

「そーれーの、よいしょ。そーれーの、よいしょ。」

と、力いっぱい引っ張りましたが、びくともしません。

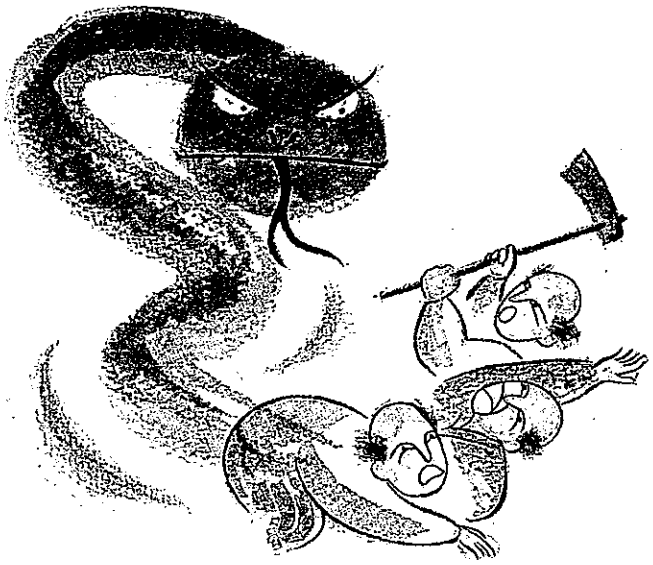
「そーれーの、よいしょ。そーれーの、よいしょ。」

と、何度も引っ張ってみましたが、それでもやはり動かないのです。

「よく見ろ、枯れ木が動いているぞ！」

一人の若者が叫びました。見るとその太い枯れ木は、ぐねぐねと不気味に動いているのです。

「こんな枯れ木が動くのは見たことがない。」
「枯れ木じゃあないぞ。これは大蛇だ！」
それは、水路の中で黄色い腹を見せて波打たせている大蛇だったのです。
一郎兵衛が歩みでて言いました。
「わしは、村一番の力持ちじゃ。次郎兵衛淵のお前なんかに負けてたまるか。」
と、大蛇に向けて力いっぱい鍬をふりおろそうとしました。
すると大蛇は、ぬうっと鎌首を一尺※ほども持ち上げました。眼をらんらんと光らせ、鼻からは霧のような生臭い息をはき、口は真一文字に閉じているのにその間から長くて赤い舌をべろべろと出し、こちらをにらんでいます。この世のものとは思えないおそろしさでした。
「たいへんだ。逃げろ。」
若者たちは村へ飛んで帰り、恐ろしい大蛇のことを村人たちに話してまわりました。



大蛇が出たその夜から雨が降りはじめ、七日も続いたのでした。この雨で水路から水があふれだし、田畑が水につかりそうになりましたが、ふしぎなことが起こりました。
あの大蛇が水路の中にうずくまり、水路の水をせき止めてくれたのです。おかげで田畑は水につかることなく、守られたのでした。
もしかしたらこの大蛇は、村人たちの困難を助けようとやってきた神様の使いかもしれないと、村人たちはたいそうありがたがりました。そして、ますます田んぼ仕事に精を出したということです。

※とゆ…樋（とい）のこと　水を送るためにかけわたした管
※一尺…約三〇センチメートル